

2024年7月28日 土浦めぐみ教会礼拝

## 受けるよりも与える方が幸い

使徒 20 章 31～35 節

山口陽一

はじめに

土浦めぐみ教会は TCU にとってもっとも関係の深い教会の一つです。今朝は TCU デーとしてお招きいただき、心より感謝いたします。まず短い動画をご覧ください。この2年、TCUは存続と発展のために抜本的改革を行っておりますので、どうぞお祈りください。新学長が決まり 8 月 1 日に発表します。今日は学長代行としての最後のご奉仕になります。

### 1, クリスチャンの安息と働き

クリスチャンになるということ、罪を赦されて、神の子とされるということは、イエス・キリストのような人になるということです。言い過ぎでしょうか。罪に死にキリストのいのちに生きるわけですから、生き方が変わります。神のかたちの自分を回復し、隣人との関係が回復し、働き方が変わるということです。今日は、「働くこと」をテーマに聖書に学びたいと思います。

皆さんは「仕事」と聞けば、お金を得るための働きと考えるでしょう。教会の働きをするのは仕事とは言わずに「奉仕」と言い、東北の被災地支援に行くのは「ボランティア」と言って区別すると思います。お金を得るための「仕事」、それ以外の「奉仕」や「ボランティア」と区別していると思います。しかし、聖書にはそういう区別はありません。聖書において「働くこと」は、広い意味で使われます。

創世記 2 章 3 節の「神がなさっていたすべての創造のわざをやめられた」というところで使われる「わざ」、これはメラカーということばですが、多くの場合「仕事」と訳され、神の働きにも人の働きにも使われます。

ヨハネ 5 章 17 節で主イエスが「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いています」と語られたときの「働く」はエルガゾマイです。パウロが「その家に住んでいっしょに仕事をした」（使徒 18 章 3 節）というところでもエルカゾマイが使われています。ピリピ 2 章 30 節には「彼はキリストの働きのために、死ぬばかりになりました」とあります。ここでエルガゾマイの名詞形で「働き」と書かれているのは福音宣教のことです。聖書では、このように、神の働きも、人の働きも、生活の糧を得るための仕事も、人助けも、福音宣教も、

みな「働くこと」なのです。

TCU では、「神の国の働き人を育て」ています。伝道や牧会のような教会の働きも、生活の糧をえるための仕事も、教会での奉仕も、社会でのボランティアも、すべて神の国の大切な働きであると考えています。私たちが救われたということは、被造世界を管理する働きがイエス・キリストにあって回復してゆくことなのです。

## 2, キリストが教えた働くことの意味

働くということは、聖書の教えによれば、与えること、あるいは与え合うことです。しかし、神に背いた人と世界は、働くことは「むさぼり」（奪うこと）にしまいました。

神さまに立ち返って福音のための働き人となったパウロは言います。

使徒 20 章 33～35 節「私は、人の金銀や衣服を貪ったことはありません。あなたがた自身が知っているとおり、私の両手は、自分の必要のためにも、ともにいる人たちのためにも働いてきました。このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、覚えているべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです。」

パウロにとって働くことは、福音を伝えることも、天幕づくりをすることも同じです。神さまから与えられた彼の使命は福音を宣べ伝えることでしたから、それを優先しますが、天幕づくりを見下げたり、嫌がったりしません。彼は、自分のためだけではなく、共にいる人たちのためにも働きました。仕事は大変ですが、労苦して、弱い人を助けることができると思うと、俄然ファイトがわいてくるのでした。パウロは、それは主イエスご自身が「受けるよりも与えるほうが幸いである」と言われたことを覚えてのことであり、「受けるより与える方が幸いであることを、あらゆることを通して示してきた」というのです。これは頭で考えた理想ではなく、彼の実感なのです。

パウロはエペソ 4 章 28 節でこのようにも言います。「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」

盗みをしている人が、人に与えるために働くようになる、というのは極端に思うかもしれませんが、人が救われるということは、すべからくそういうことなのです。神から管理するように授かった世界を自分のものだと考える。これは神のものを盗んでいるようなものです。造られた者が、造り主のようになろうとするのは倒錯した、まるでひっくり返った高ぶりです。

得よう得ようとする「むさぼり」が罪の原点です。不思議なもので、得れば得るほど、まだ足りない、誰かに奪われるのではないかと不安になるのです。ですからイエスさまはおっしゃるのです。「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません」(マタイ 6:19~20)

「受けるよりも与えるほうが幸い」これは、クリスチャンだけでなく、すべての人にとって役に立つ生活の処方箋です。しかし、私たちは、三位一体の神ご自身から「与える」ということを学ぶべきでしょう。

### 3、三位一体の神は「与え給う」神

父なる神は、「ご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」方(マタイ 5:45)です。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」方(ヨハネ 3:16)です。

そして子なるキリストは、ご自身を、そのいのちまでも惜しみなく与えて下さいました。それによって人は「愛」の何であるかがわかったのです。

さらに聖霊なる神は、黒子のようにご自身を無にして、父なる神の独り子イエスを与えてくださるのです。

神は、徹底して「与え給う神」なのです。パウロは言います。

31~32 節「私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」

「受けるより与える方が幸い」。これは「神の国」の生き方なのです。私たちは裸で母の胎を出てきました。また裸でかしこに帰るのです。得よう、得よう、何一つ手放すまいとして、心配ごとを増やすような生き方ではなく、安心して、天に宝を積むことを喜びとしましょうではありませんか。同じ仕事でも不平を言いながらするのと、感謝して、献金して、栄光を神にお返しするのとでは、大きな違いです。

私が小学校で習った世界の人口は 46 億人でしたが、今やこの世界には 81 億人が暮らしています。格差が大きな問題です。NGO オックスファムによれば世界の富の半分は上位 2000 人が所有しています。今年の報告によれば、世界人口の半数以上が貧しくなった一方、世界トップの富豪 5 人は富を倍増させたそうです。グローバル大企業の 21~22 年の利益は、17~20 年の平均と比べて 89%の

増だそうです。神のみこころは、すべての人が10分の1を捧げて助け合う世界なのです。主イエスから「受けるよりも与えるほうが幸いである」という神の国の働き方を、世界が学ばなければなりません。私たちが「みこころが天になるごとく、地にもなさせたまえ」と祈るのは、そのためです。

おわりに

なるべく楽をして多くのお金を得るのが良い仕事だ、と思わせる風潮がありますが、これは間違いです。労苦して正しい仕事をし、困っている人に分け与えるような働きかたこそ、幸いな働き方なのです。

与えるのはお金や物に限りません。人の話を聞くとか、先に許すとか、誰かのために祈るとか、自分から進んで挨拶するとか、「得るよりも与える」と言う生き方はどこにでもあるのです。

聖書は、得てはいけないと言っていません。主は言われます。「わたしを試してみよ——万軍の主は言われる——わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか」(マラキ3:10)。そして私たちは祈ります。「私たちに日ごとの糧を今日もお与えください」。大いに与えることができるように、大いに与えてください、という信仰でゆきたいと思います。

詩篇112篇9節に「彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠に堅く立つ」とあります。パウロはここを引用してⅡコリント9章6節でこう勧めています。「私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます」

土浦めぐみ教会の皆さんが、豊かに蒔き豊かに刈り入れ、ますます豊かに蒔き、ますます豊かに刈り入れるようになって行かれることをお祈りいたします。